

北川副小 授業をUD化

通常学級における発達障害児童生徒の支援が課題となる中、佐賀市の北川副小(松田美恵校長、571人)は「授業のユニバーサルデザイン(UD)化」に取り組んでいる。全児童の「認知特性」を1学期に把握し、実態に合わせて板書や声の掛け方などを工夫。授業への集中力を高めるために教室の掲示物を極力減らし、椅子の脚にカバーをかぶせて音を抑えるなど、通級指導教室の実践を通常学級に広げている。

■1面参照



通常学級でも黒板周辺の掲示物を減らし、椅子の脚にはテニスボールのカバーをつけている。佐賀市の北川副小

「認知特性」把握し工夫 通級指導実践応用

北川副小は昨年度から6月に図形の捉え方や文字、数字の把握、耳から入った情報の記憶力など認知特性を評価する調査を実施している。調査は、岡山県総合教育センターが作成した評価シートを使用。句読点のない平仮名の文から複数の単語を見つけたら、8桁の数字をそのまま書き写したり、立方体を図示したりする問題を解かせる。

この調査で視覚、聴覚、記憶などの認知の特徴や得意、不得意が示される。ある学級は、図形の認知が苦手な児童、短期記憶が苦手な児童がそれぞれ約3割を占めた。「話した内容をすぐに質問したり、集中が持続できない児童が多い」と感じていた担任の認識とも合致したという。

評価結果は学級の認知特徴と捉え、図形を書かせる際は「縦、横」と言語化させ、板書では漢字の部首を色分けするようにした。指示する際も短い言葉で具体的に伝えたり、指示を書いたメモを渡したり、ゆっくりと順序立てて話すなど工夫している。

同校は、2006年度に県内で初めて発達障害の通級指導教室を設置。専門教諭が配属されたこともあり、松田校長は「発達障害児童に対する通常学級の支援を考える中で、授業のUD化が必要と感じた」と話す。

全校的に黒板周辺の掲示物を減らしているほか、椅子の脚にテニスボールを再利用したカバーを付けて床との摩擦音を抑制。授業内容を明示、精査する「視覚化」「焦点化」など、特別支援教育の手法も積極的に取り入れている。

松田校長は「取り組みは始まったばかり」とした上で、「発達障害の傾向がある児童の多くは通常学級だけで指導を受けている。児童のさまざまな『困り感』にどう対応していくか。発達障害の有無にかかわらず、学習意欲を失わせないことが授業UD化の狙い」と話す。

(山口貴由)